するが文化の散歩道

彼らが生きた明治、大正、昭和の時代に思いをはせながら、静岡の魅力を再発見。

しずぶんツアー vol.2

小泉 八雲　1850（嘉永 3）年－1904（明治 37）年

『怪談』の作者としても知られる小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）はギリシャに生まれ、渡米を経て、明治時代に来日。晩年、避暑地としてたびたび焼津の地を訪れ、家族とともに海水浴を楽しみました。八雲は焼津の海と人情を愛し、この地を舞台とした随筆「焼津にて」「乙吉のだるま」などの作品を書いています。八雲の幽霊譚「漂流」もこの地で聞いた話をもとに書かれた作品で、記念館には作品に出てくる「板子（いたご）」の実物も展示されています。焼津市内には八雲文学散歩コースも整備され、記念碑や作品ゆかりの地を巡ることができます。

代表作

Kwaidan『怪談』 1904(明治37)年

「耳なし芳一」や「雪おんな」などハーンの代表作といえる怪談が収録された晩年の傑作。日本の古い物語にハーン独自の西洋的思想が融合された幽玄の世界が繰り広げられる。

小泉 八雲の作品に出会える施設

焼津小泉八雲記念館

詳しくは裏表紙をご覧ください。

芹沢 銈介　1895（明治 28）年－1984（昭和 59）年

芹沢銈介は、1895（明治 28）年に静岡市葵区本通に生まれました。東京高等工業学校（現・東京工業大学）工業図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と、沖縄の染物・紅型（びんがた）に出会ったことを契機に、型染を中心とした染色の道を歩み始めます。芹沢には色彩と模様に対する天与の才能があり、従来の染色の枠組みにとらわれない、新鮮で創意あふれる作品を次々と制作しました。芹沢は非常に多作で、また染色にとどまらない幅広い仕事をしましたが、生涯を通じて明解かつ温和な作風を貫いており、多くの人々に愛好されました。

代表作

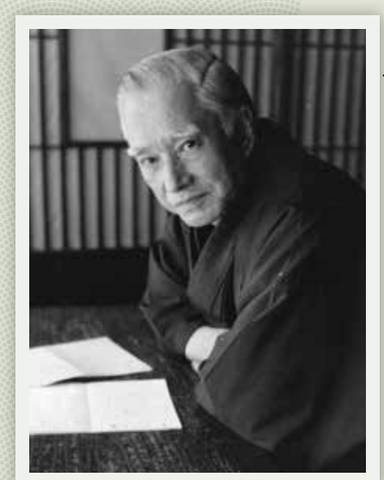
「伸びゆく静岡」 1969(昭和44)年

旧静岡市の市制 80 周年を記念して制作された作品。富士山を中心に安倍川、駿河湾など静岡のモチーフが盛り込まれている。

芹沢 銈介の作品に出会える施設

静岡市立芹沢銈介美術館

詳しくは裏表紙をご覧ください。



中 勘助　1885（明治 18）年－1965（昭和 40）年

自身の子どもの頃を綴った『銀の匙』で有名な中勘助は日本の近代文学を代表する作家です。岐阜の今尾藩士だった中家の五男として東京で生まれ育ち、第一高等学校、東京帝国大学で夏目漱石に学びます。1943（昭和 18）年 10 月から 1948（昭和 23）年 4 月までの約 4 年半、転地静養のために東京を離れて夫妻で静岡市郊外（旧安倍郡服織村新間）に移住しました。帰京後の 1957（昭和 32）年には静岡市立服織中学校の校歌を作詞するなど、静岡との縁は永く続いています。

代表作

銀の匙 1926(大正15)年 岩波書店

東京朝日新聞に連載された中勘助の自伝的小説。装丁意匠は中勘助が原案を考え、兄嫁の末子が下絵を描いた。

中 勘助の作品に出会える施設

中勘助文学記念館

詳しくは裏表紙をご覧ください。

撮影：相田 昭

小川 国夫　1927（昭和 2 年）年－2008（平成 20）年

藤枝生まれ藤枝育ちの小川国夫は、自らを「枝っ子」と称する郷土愛の持ち主でした。若き日にフランスに留学し、地中海沿岸をバイクで旅をした体験をもとに、代表作『アポロンの島』を執筆し作家として注目を浴びることになりました。小川国夫の小説は、聖書と欧州体験を題材とした作品をのぞき、そのほとんどが藤枝、焼津、大井川河口域など、郷土である駿河湾西岸を舞台としています。文学館は、小川の散歩コースでもあった蓮華寺池のほとりに建ち、作品に登場する藪田富士などを見ることができます。

代表作

アポロンの島 1957(昭和32)年　青銅時代社

地中海の溢れる光の中で、ひとり単車で旅する青年が出会う人々や風景を描いた、青春の書というべき一冊。

小川 国夫の作品に出会える施設

藤枝市郷土博物館･文学館

詳しくは裏表紙をご覧ください。